

# Trial & Error

トリアル・アンド・エラー

No.50



(左上) ソマリア (右上) タイ  
(左下) エチオピア (右下) 日本

JVCアジバール病院 .....	2
しんどいでっせ, ほんまにノ .....	6
UNHCR 広報誌「REFUGEESより」 .....	8
シリーズ「平和・人権・開発」第3回 .....	10
50号記念, 今何考えてる? .....	12

エチオピア

# JVCアジバール病院

林 達雄

(メディカル・コーディネーター, 外科医)

## 4月1日 雹<sup>ひょう</sup>

午後3時半。外来用のテントに集まり、ヘルスアシスタント(18カ月の教育を受けたエチオピアの裸足の医者)のゲタッチョ君や地元の高校を出たワーカー諸君と歓談していたときである。あたりが暗くなり、気温が急激に下がったかと思うと、雷鳴とともに雹<sup>ひょう</sup>が降り始めた。直径8mm位に大粒で、地面にはじけ、パチパチと音をたてる。頭に直撃を受けるとかなりの痛みを覚える。3月後半から午後になるとしばしば雷雨が降るが、大概是20~30分で止んでしまう。だが、今日の降りはいつもと一味違う。皆、テントの入り口から外を凝視している。疾風にテントのすそがめくれあがる。激しい雨足は地面をけずり、隣りのテントとの間にたちまち川ができる。20分たっても西の空は明るくならず、雨足はさらに強まる。

「ブラボー、初めてだ!」ワーカーの誰かが歓声をあげる。実に5年ぶりの雨だという。彼等の実家のほとんどは、この近くで農業を営んでいるため喜びはひとしおなのだろう。「コングラッチュレーションズ(おめでとう)」、私はワーカー達1人1人に握手してまわる。アムハリ語で祝辞が述べられないのがいささか残念ではある。雨さえ降り続けば私達の闘いにも光明がさす。

干ばつのために自分たちの土地を棄て、アジバール周辺に集ってきた人々を対象に、2月20日から診療を始めた私達だが、人々の状況の今後を占う好材料が1つも見あたらなかった。病気のために衰弱した人々の生命を1カ月でも先までのばしてゆく、それが私達の務めであるが、日々増え続ける患者を前に、暗闇に向かってやみくもに徒労を繰り返しているとさえ思い始めていた。3月にはいつから時おり雨は降っているが散発的で持続しない。最低5日は降り続かねば耕作は可能にならないと言われている。そうした時点でのこの豪雨である。飢えと寒さで弱り果てた人々も、「今」さえ生き長らえれば、もと居た土地に戻り、耕作を再開できるかもしれない。

4時20分、雹は多少弱まりながらも続く。一時明るくなった西の空には、再び雲がたちこめ、あたり

はずで薄暗い。病院はなだらかな斜面に建っているため、テントの合い間を流れる水は怒濤の如く病棟の方に向う。第2病棟はずで浸水が始まっており工藤看護婦を始めとするワーカー達が、氷雨の中排水溝を掘っている。栄養失調の小児の多い第1病棟には雹<sup>ひょう</sup>が吹き込み、ドアが開かぬ程降り積もっている。早速患者たちを無傷な第3病棟に移す。60人近くいるワーカーの中でも、先頭を切って外に飛び出て働く者、毛布にくるまってじっとしている者にとに分かれてしまう。キッチンには焚き火がおこされ、その周りで冷えきった体を癒している者もいる。ランドクルーザーを渡し舟のように使って病棟にミルクやビスケットを運ぶ。急流の中、ハンカの隔離用テントに向う。流れが激しいため、途中からは歩いて渡らねばならない。手渡しで子供を車に運び入れる。キッチンに戻ったときには、クツの中、下着にいたるまでずぶ濡れである。砂糖のたっぷりはいった紅茶がやけにうまい。焚き火に照らされたワーカー達の黒い顔が輝いている。一仕事終わった後の団欒も悪くはない。ただ今日の水浴びはちょっと冷たかった。

6時、小降りになったので車で宿舎に向うが、途中の川が増量のため渡れない。この町で補助食配給を担当するアメリカの救援団体 ワールド・ヴィジョン(W・V)の宿舎に毛布を借りに行く。W・Vの調整員の厚意で、6人のワーカー達ともども彼等の宿舎に泊めてもらうことになる。アメリカンスタイルの夕食を御馳走になった後、フィリピンの医師の部屋に泊めてもらう。彼の現場采配のおかげで、給食を担当するW・Vと医療を行うJVCの関係が円滑に保たれてきたのである。寝袋の上に毛布をかけても寒さのため眠れずひたすら朝を待つ。腹痛も加わり、用をたすため3度星空を眺めた。そのうち一度はトイレに間に合わず、小学校以来の失態を演じてしまう。朝方、発熱のため体が暖まりようやく眠る。

翌朝、町の入り口の土手の上に人だかりができ、穴を掘っている。近くに止まるトラックの荷台を見ると17~18体の死体がおり重なっている。大半は老人のものだが、中に母と子の一組の遺体が混じる。4~5体ずつ1つの穴に埋められ、できた土饅頭の

上に円く石が並べられる。この日の埋葬者の数は、イスラム、キリスト教合わせて75人、未確認の者も含めれば100人をこえると言われる。生き延びた人人は陽だまりの中でコーヒーをすすり、子供たちははしゃぎ始める。

## 地域差

同じエチオピア国内といっても地域差は激しく一概には語れない。南東部のソマリア国境周辺は、砂嵐が吹きあれる灼熱の砂漠地帯、南西部は比較的豊かな農村地帯、アジスアベバは物質の豊かな近代都市であるし、干ばつとゲリラで有名な北部は、高低差の激しい山岳地帯で3000年の歴史を誇る。北部ウォロ州の中でも、標高2200m以上の高平原と1000m以下の低地とでは、雨の恩恵も、できる作物の種類も異なる。急斜面にへばりつくようにして耕作を続ける高地は一見苛酷に見えるが、雨の恩恵も受けやすく干ばつによる被害も比較的少ない。4～5年前からの干ばつによる被害をもろに被っているのは低地で、雨が少ないのに加えて、森林伐採のため土地が保水力を失い、砂漠化の進行速度もはやい。高地で作られる大麦、小麦に比べて、低地でとれるテフやソルガム（もろこし）の生産は激減し、市場価格も高騰を続ける。ヒエの一種テフを粉にして発酵させた後に焼いたフワフワしたスポンジ状の酸味の効いたパンーインジェラは、エチオピア人の唯一無二の主食であるが、庶民の口にはいりにくくなりつつある。栄養失調と下痢のために弱り果て、ミルクもカユも食べられなくなった子供でさえ、インジェラなら食べられるという。

## アジバール

ウォロ州南西部の山間部、州都デジュから120km、標高2900mの地点にある町、周辺部を合わせて人口4000人、パイプラインによって共同水道と連なる深井戸、高校、保健省管轄の診療所、レストラン、ホテル、バーなどがある。

救援・復興活動を行う救援復興委員会（RRC）が8年前から干ばつ被災民に対して小麦等の食糧を配給しているが、配給量は少なく、町まで食糧を受け取りに来る人の数もまばらであった。最初に調査に入った1月31日の時点で、アジバールを含む郡内に17万人の被災民がいるにもかかわらず、8000人が3カ月過ごすだけの在庫しかなかった。また、郡内で最も状況がひどいといわれる低地から90kmの距離

にあり、食糧配給に適した場所ではない。足の弱った低地の住民は歩いてアジバールまで来ることが困難であり、たとえ来れても、持ち帰りきれず、途中で一部を売り渡しているという。アジバールはまた再定住政策の中継点の1つであり、デジュから食糧を積んだトラックが着くと、折り返し人を乗せ送り出してゆく所でもある。

## JVCアジバール病院

### 緊急救援 —

2月20日、テントを3つ仮設し、診療を開始した。約40人の外来患者は風邪・皮膚病・結膜炎が主で、重症者の姿は見えない。日本人スタッフは医師1人、看護婦1人。エチオピア人スタッフは20人、特に10人の英語の話せる高卒の者を病院業務の担い手として教育し始めている。病院の敷地内では、地元の大工による調理室や便所、病棟の建設が急ピッチに進められる。同じ頃、ワールド・ヴィジョン（W・V）は栄養失調の子供、妊産婦、授乳中の母親を対象に補助給食を開始した。W・Vは、8000人に給食可能な施設を建設し、良い悪いにかかわらず、アジバールに人を集めてしまうことだろう。アジバールに、今後、飢えのために衰弱した病人があふれることを私たちは予想し、見切り発車のような形で、プログラムを開始したのである。緊急救援を効果的に行うためには、起こるべき事態に常に先行する形で、資金、資材、人材を投入しなければならない。プログラム開始が遅れば、その間に多くの人が生命を失うだろうし、読みがはずれば、資金の無駄だけでなく、いたずらに人々を集積させてしまうなどの弊害を生む。緊急救援は人の生命を預かるギャングルの側面を持つ。

### 診療開始 —

JVCが診療を開始してから1月後、アジバールに1万3000人の被災民が集積した。再定住を待つ人々が1万人、W・Vにより補助給食を受ける人々が3000人である。この他に、1万2000人の地域住民がW・Vに月に一度食糧を受け取りに来る。再定住やW・Vに登録されていない人々（特に高齢者）もきた。飢餓のため家を捨てざるを得なくなり、食糧を求めてアジバールにやってくる。年寄り達は、W・V給食センターやJVC病院の門前に集まり、「食糧よこせ！」とシュプレヒコールをあげる。彼等は物乞いに来ていたのではなく、「こんなに腹を減らしたわし等に

どうして食糧をよこさないのか！」と腹の底から怒っている。こうした年寄りを診察室に入れると入院の要求をして居座るし、熱さましにアスピリンを与えるとボリボリと丸カジリしてしまう。ところが入院させると、緊張が解けるせいか、急に発熱し、おカユやミルクもあまり摂れぬまま、死んでしまうことが多い。

4月24日現在で、外来患者平均150人、入院患者140人(最新情報(5/10)では180人に増加)。死者は平均3人。入院患者に対しては、ビスケット、ミルク、ポリッジ(粉ミルク・小麦粉・砂糖・食用油を配合した粥)が年齢や栄養状態に合わせて、4回から6回与えられる。多い病気は、栄養失調に伴う下痢症+眼疾患、寒さによる肺炎、糞便を介して伝染するアメーバ赤痢、細菌性赤痢、シラミに媒介される回帰熱、低地から来た人の持つマラリア、人間が急激に集積したために多発、蔓延するハシカや結核。顔や体を洗えぬために広がる皮膚病、結膜炎、トラコーマ。

朝8時に診療開始。87人のスタッフ(日本人5人、エチオピア人82人)は、外来・病棟・調理・水運び・墓掘り等の持ち場に散る。外来患者は門の所でカードを渡され、待ち合い室へ。重症者は、医師に診察され、そのまま入院する。中にはその場で息を引き取る者もいる。待ち合い室ではもと学校の先生をしていたエチオピア人スタッフの1人によって健康教育を受ける。下痢時の水分補給の重要性、眼疾患(トラコーマ、ビタミンA欠乏症)、盲目にならぬための注意等がイラスト付きで話される。待ち合い室の一角ではORS(経口補水液一水に砂糖・塩・電解質を加えたもの、日本でいうとポカリスエット等)が、常時用意され、下痢の患者は好きな時、好きなだけ飲むことができる。名前を呼ばれた患者は、体重・身長を測定された後、ヘルプアシスタントにより診察、処方を受ける。ここでも重症者は入院の運びとなり、他の者は薬局、注射室にまわる。薬局では投薬上の注意を受け、第一回分の薬をその場で飲む。生まれてから一度も薬を飲んだことのない者にとって大粒の錠剤は飲み下しにくい。使う薬は総てエチオピア国内で普通に使われているもの。日本の薬は値段が5倍から8倍も高く、商品名が特殊で混乱をまねく。ペニシリンの投与は注射で行う。感染やショックの危険はあるものの注射が一番確実である。外来の目的は主に教育と入院を必要とする重症者の選別にある。症状や衰弱の度合の他、「食糧の

配給を受けているか否か。屋根の下に暮しているか否か」が入院のおもな決め手となる。

### 病棟の内部 —

病棟は、3つのトタン張りの建物(12×6m)とハシカと熱・血便を主訴とする疾患の隔離用テントからなる。尻のあたる所に穴のあいた下痢用の竹製のベッドはあるが、ほかの患者は、床にビニールシートを敷き、毛布3枚で寝てもらう。小児病棟は食物の与え方や子供の暖め方を知らない母親との根気比べである。飢餓のためばらばらになって離村した母親は、地域社会の伝統から分断され、子供の育て方を知らない。子供を脇に置き、自分だけ配給のおカユを食べる母親さえいる。慢性の下痢のため脱水症をおこした子供に対してスプーンでORSを飲ませ続けるよう指示しても、根気がなく、子供が嫌がるとすぐやめてしまう。子供の状態に鈍感で、死に至り冷たくなると突然泣きわめき始める。「子供を殺すのは君なんだよ。」入院前きつく申しわたすことにしている。

施設として他に体や服を清潔に保つための洗い場や、蒸気を利用して毛布を消毒しシラミやノミを殺す蒸気室があるが、燃料であるマキの消費を減らすため現在使用されていない。同じ理由で患者にパンを焼いて配ることを止め、ビスケットに切り換えている。マキの大量使用は森林伐採に拍車をかけ、砂漠化の促進に結びつく。石油燃料の使用や太陽熱の利用を考慮中である。(経済的で故障の少ないコンロやソーラーシステムに心あたりがある方は是非とも御連絡下さい。JVCのみならず、世界各国の救援団体からの要望でもあります。)

現在病院の一角には屍体安置所が作られ、死者を葬う「泣き節」が毎日聞えてくる。そこから、西の丘の上のキリスト教の墓地か東の土手にあるイスラムの墓地に運ばれ、病院のワーカーである墓掘り人夫によって埋葬される。

### アジバールでの業務分担

現在のアジバールにおける救援活動は重要な順から次のようになる。

- ①食糧配給
- ②寒さを防ぐための仮住居、毛布等の配布
- ③保健衛生。水の確保、予防接種、便所作り等
- ④医療

現在のところ、①は難民救援委員会(RRC)とW・

V, ②はRRC, 町, 郡, ③は保健省, W・V, 町, ④はJVC, W・Vが担当している。私達が、現在行っている医療は、前三者が確保された後、始めて効果を発揮するプログラムである。食糧・住居・水・予防が不十分な場所で、薬だけ与えることは、治療に結びつくどころか、時に人を殺すことにもなりかねない。第三者との連携が必要条件となる。3月の下旬、JVCの提唱により、W・V, 郡, 町, 保健省, RRCの地域代表者が集合し、連絡会議が持たれた。しかし結果は、エチオピアの役人達が、資金力豊富な団体W・Vに様々な要求をすることに終始した。しかし、私たちは屈しない。ねばり強く話し合いの場を作り続けるつもりである。「アジバールに集った人々に対して、どのような手助けをすることが最善か」すべての議論は、この一点に集束しなければならない。

## 今後の展開

病院の建設を終えた今、内部の充実と外へ出向くことが課題となる。病気のために本当に衰弱した人人は病院にまで来れない。拠点としての病院ができ次第、弱った人々の所に、こちらから足を運ぶことが当初からの計画であった。まずは、アジバール周辺で、車を使って移動外来を行い、重症者を病院に連れてくる。次に、郡内で最も飢餓が進行しているといわれる低地を調査し、そこでのプログラムの可能性を打診する。

また、この活動を現地のエチオピア人に譲りわたす準備をしていく。可能性のあるものから幾つかあげてみよう。

- ①病院経営を保健省に委託する
- ②今病院で働いているワーカーに運営をまかせてゆく。この場合、資金は日本から送金する
- ③ワーカーの一部に奨学金を出し、ヘルスアシスタントの資格を得た後、この地域に戻ってきてもらう
- ④病院ワーカーが各村に帰り(住み)、地域住民の側にたったヘルスワーカーとして働く

短期の救援活動のためアジバールにきた外国人がここまで望むのは思いあがりかもしれないが、できる限り、こうした方向に近づけてゆきたいと思う。

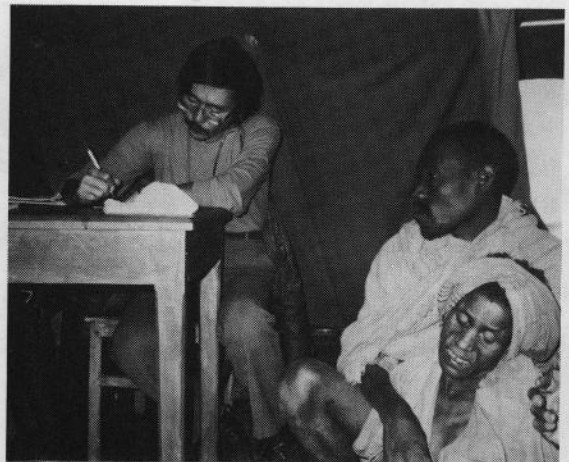
今アジバールでは雨が降り続けている。アジバール付近では、農耕が開始され、緑が芽吹きはじめた。しかし、家を棄て、アジバールに集ってきた人々にとって、この雨は冷たく、肺炎や死をもたらす。家

に戻ったところで、彼等には種もみも家畜も農器もない。政府にそれらを保証してゆくだけの力もない。雨の後、アジバールの市場で、テフとソルガムは史上最高の高値を記録。もはや、雨が降ったからといって、総てが解決する時期は過ぎてしまった。

## 日本人とエチオピア人

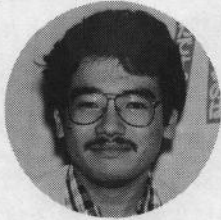
底抜けの陽気さを身上とするアフリカの中で、エチオピア人は最もネクラだと言われる。一般に勤勉で、時間にも正確である。特に北部農村の人々は人情に篤く、私が今回帰国する際に病院で働く80人のワーカーたちは金を出しあって、エチオピアのシンボルである山羊のマークのついた金の指輪を贈ってくれた。アジバールにあるバーからはエチオピア民謡が流れてくる。心情のこもった節まわしで、日本の演歌によく似ている。距離的にも遠く、言葉も肌の色も違うが、エチオピアと日本は共通する部分を多く持っている。今、一方は、飢え、他方は飽食の中に生きている。だがそれは、自分で選んだ訳ではなく、たまたまその場に生まれ落ちたに過ぎない。

あなたが今飲むコーヒーも自分1人の力、あるいは日本という国の中だけで獲得したものではないはずである。飢えに苦しむ人々にも日々の生活はある。陽だまりの中でコーヒーをすする家族、そのまわりで遊ぶ子供の姿を思い浮かべてほしい。そこに、あなた自身の分身や子供の姿が見えてくるかもしれない。すべては、相手と連がりを持つとうとする想像力から始まる。エチオピアについても日々事実の羅列しか見ていない私よりも、日本で生きるあなたの方が、エチオピア人より深いきずなを結べるかもしれない。



診察室に入ったとたん緊張がとけてしまう

# しんどいでっせ、 ほんまに！



しま としあき  
嶋 紀晶

(ソマリア補助給食  
プロジェクト調整員)

## —新難民の当初の状況は？

ルーク地区にたどり着いた難民は、今注目を集めているエチオピアほど緊急事態ではありませんが、それでもかなり衰弱した人はいました。脱水症状や肺炎にかかっている人が多かったようです。そこで柴田さん(現東京事務所事業部)が、JVCの宿舎に緊急病棟を建て、必要な食糧を購入し配給を始めたんです。フルーツ・ジュースなんかもあったんですが、最初子供たちが、げげんそうな顔をしましてね。紙パックに入っていましたから「何やこれは？」ちゅうわけですよ。それでも飲んでくれたんですが、さすが弱ったお母さんは受けつけず、別に購入したミルクをゴクゴク飲んでました。医療面での薬の投与などは、AMREF<sup>\*1</sup>の斎藤昌子さん(看護婦)の指示を仰ぎました。ソマリアでは難民保健局(RHU)のサービスが行きとどいていて、ソマリア人の医者もいます。しかし、これがまた分らんですわ。医者が患者に手を触れず、子供の皮膚をつまむだけ。「脱水症状だ」「そりゃ、分っとる」「経口補水塩(ORS)だ」「そりゃ、わしでも分る」と言ってるうちに、その子供が死んだんですね。技術的には彼らも分ってるはずなんですけど、どうもいまひとつとところがあるんですね。RHUの倉庫には、点滴もたくさんありましたが、これも使わんです。とにかく臨時的ですが、病棟での活動を続けながら、私はモガディシュでソマリア政府の国家難民局(NRC)、RHU、国連機関、民間の救援団体(Volag)等と契約を結び支援をとりつけるため、事業計画書作成にとりかかったわけです。

## —うまくいった？

いやあー、これには本当に泣かされましたわ。当初、国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)がNRCに新難民の収容キャンプを設置するよう指示したのですが、肝心のNRCが動かず具体的な政策が出てこなかったんですね。そうこうするうちに、NRCも

やっと重い腰を上げ、候補地探しを始めたのは良かったんですが、この候補地が4転、5転。徹夜で作成した事業計画書をNRCに持っていったところ、「あそこはキャンセルになったよ、キミ」と担当官に言われてましてね、ほんまに頭にきましたわ。こうした活動がスムーズにいかないのは、どこでも往々にしてあることなんですけど、昨年11月もNRCが中心となり新難民を、本当の難民(real refugees)と干ばつ被災民(drought victims)に分ける調査を行いました。完全ではなかったせいもあると思いますが、食糧配給の対象とならなかった人たちには、その基準が分るはずありませんから、当然「なんで、わしにはくれへんのや」という不満が出たわけです。混乱を生じるのは当たり前でしょう。

## —JVCの反応は？

もうソマリア政府の政策に振り回されっぱなしだったので、結局コンパウンド近くの病棟で活動を続けるだけで、実質的な補助給食のプログラムとしての食糧配給は2月中旬まで行えませんでした。とうとう「あんたら腹が空いとらんから、彼らの気持が分らんのや」と尻をまくってしまいました。見切り発車ですわ。「よくぞNGOの1人として言うてくれた」と思われるかもしれませんが、幸いこのプロジェクトは朝日(厚生文化事業団)さんからお金だったので、そう言えたんですわ。もしUNHCRのプロジェクトだったら、こうは言えなかったでしょう。それなりのメリットはあるでしょうけれど…。それでJVC独自の補助給食を始めようちゅう訳で、これまでの病棟を閉めて、場所をマグドロー(難民キャンプ、マガネイとドリアンレーの中間地点)に決めたんです。

## —対象者はどのようにして選ぶの？

補助給食のポイントは、「ウエイト・アンド・ハイト」による栄養度調査です。つまり子供の体重と身長を測定し、栄養度のパーセンテージを出すわけです。ここでも面白い話がありまして、現在JVCの補助給食センターでは5人(旧難民)の地域保健員(CHW)が働いているんですが、彼らに栄養調査をやってもらったんです。彼らは一応RHUで教育を受けているはずなんですけど、出てきた数値が変なんです。本来、70、75、80、85という具合に5%刻みの数値が出るはずなんですけど、私が見てみると「79」とか「82」という記録がしてあるんですよ。もちろん、技術的には細かい算出方法でやれば出るんですが、これでは分類ができません。また、最初か

補助給食の対象者数

1985年4月上旬

子 供	集中給食 (70%以下)	43 人
	補助給食 (71~85%)	347 人
妊 婦		78 人
授乳婦		48 人
老 人		186 人
合 計		702 人

らやり直しです。とはいうものの、説明だけでは彼らも分らないし、やる気が無くなってしまいますので、調査と並行して、米、豆、油を使った実際の補助給食も始めました。RHUの基準に従って、70%以下の子供に集中給食、71~80%以下の子供に補助給食、それに子供の健康状態が不安定であるという判断から、われわれは通常対象外となる81~85%以下の子供たちも含めました。それから妊婦、授乳期の婦人、老人ももちろん対象となります。彼らが十分な食糧を受けていなかったため、乱暴な形で始めたというのが本当のところではあります。

—どんな物を食べるの？

初め、JVC独自でルークやモガディシュで購入した米、豆、粉ミルク、油、砂糖などで調理しました。しかし、準備不足もあり1週間でルークの町から米や油が無くなってしまったんですね。私自身もこの点では大いに反省しました。とはいうものの、信用問題ですから途中で止めるわけにもいかず、量を減らしながら継続しました。困り果てたので、地域難民局(RRC)のシェーク・アブディ氏に相談したところ、「ELU/CAREに行け」と言うんです。「ほんまにくれるんかいな？」と半信半疑だったのですが、プロジェクトが始まる当初から、私がRHUの代表に手紙を出して現場を見てもらったりしたのが効を奏し、しかもシェーク・アブディ氏の口添えもあったので、ELU/CAREでは期限切れ間近でしたが、ボンとトラック1台分の米、スパゲティ、



フルーツ・ジュース、ビスケット、粉ミルクなどを提供してくれました。食糧が底をついていた時だったので、これはえらい助かりました。「できるかどうか分らないが先ずやってみる。そして行動しながら賛同を勝ち得てゆく」——大きな教訓となりました。私たちの活動の目的が明確であるということもあり、その後もRHUや他のVolagがいろんな所で協力してくれるようになりました。

—何が良かったと思う？

そりゃあもう、確実に食糧が彼らの口もとに届いた事、これは大きいですよ。それと、これは3年目に入った農業プロジェクトの一つの大きな功績だと思うんですが、「話し合い」それも部族長をも含めたリーダー達とのミーティングを持てたという事は、とてもプラスとなりました。われわれ外国人は、彼らの共同体の中で活動しながら、しかもそれが彼ら自身のプロジェクトであると認識してもらうまでが勝負であり、そこに到達するにはとても大きな精神的エネルギーを消費するんですね。やっと緊急状態を脱した彼らには、生きる欲望が出てきたように見受けられます。そうそう、一応私たちも考えていたのですが、「老人にも給食を」という要求は彼らとミーティングを重ねるうちに出てきたんですよ。

—今後はどうするの？

卒直に言って、私たちの目指しているのは彼らの「自立」です。それまでの一つの過程として「補助給食」を捉えるべきです。大きく言えば、農業を基本とした保健衛生の普及でしょうか。JVCの農場で取れた食糧を補助給食でも使えたら最高でしょうね。その第一歩として、1年から2年かかるかもしれませんが、この地域でじっくりトレーニングを積んだ保健衛生が育ってくればとも思います。

—最後に一言どうぞ。

いいんですか？ 本音を言わせてもらおうと、ほんまに腹立ちまっせ。彼らはしたたかですからね。口論しにソマリアに行くようなもんですわ。でもそうせんと、本当のものが見えませんからね。しんどいんですけど。それと、日本人にたくさんソマリアへ来て欲しいと思います。それも、最低3カ月。待ってます。仕事なんぼでもありますよ。

—ありがとうございました。

\*1 AMREF……The African Medical and Research Foundation.  
アフリカ医療研究財団(NGO)

# REFUGEES

## スーダン東部

### ワドカウリ難民キャンプを撤収！

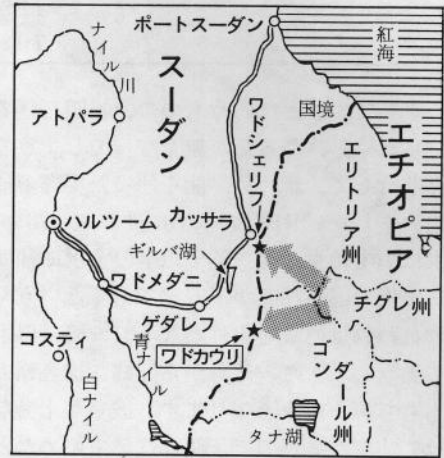
“1984年を通じて、エチオピア難民が大量に東部スーダンに流入した。UNHCRは、スーダン政府との合意のもとに現行の財源の枠内で必要な援助を提供した。しかし1984年11月初めには新流入難民は3万5000人と推定され、流入の数が多く急激な増加が見込まれたため、緊急援助特別計画を新たに設定する必要が生じた。1984年12月15日までに、さらに7万5000人が到着。1985年1月8日には合計17万人に上った。1985年4月4日現在で新流入難民の総数は約31万3000人に達している。さらに、この流入総数は1985年6月までにはまちはがなくなり60万人を超えるものと推定されている”（4月15日 UNHCR アフリカ緊急特別アピールより）

エチオピアと国境を接しているスーダン東部はかつては「アラブの穀倉地帯」といわれていた地域だが、折からの干ばつとエチオピアからの大量の難民を抱え（半数はチグレ州からの難民）、食糧その他を国際救援団体等に頼らざるを得ない状況になっている。集中的な救援活動によって最悪の状態は脱したが、もはや供給すべき水が残っておらず、難民キャンプそのものを撤収・移転しなければならなくなった。6月に始まる雨は、問題を何一つ解決しないまま、新たな問題を引き起こすことになろう。

#### 最悪の状態は脱した

まず始めによい知らせである。今年2月には10万人近くのエチオピア難民にとっての“家”となっていた「ワドカウリ」難民キャンプ（エチオピアとの国境から約40kmの地点）の状況が改善された。食糧はようやく充分な量が届いた。疲れ果て憔悴ききって生き延びた難民が、今では毎日水を汲み、薪を集め、食事を作るという儀式に没頭している。今なおひどい状況ではあるが、最悪の状態は脱したといえよう。

「国境なき医師団」、児童救援基金（SCF）、国



際救援委員会、YMCAという4つの民間団体から保健衛生の専門家が派遣され、難民の健康状態をコントロール可能なところまでにした。給食センターや診療所は満杯ではあるが、以前のようにこうした施設を人々が群れをなして取り囲むという光景はあまり見られなくなった。3月半ばの死亡率は今日に一日平均40人で、非常に高い数字だが、これは1カ月前の半分以下である。最も危険な状態の年齢層は5～14歳の子供たちだ。この子供たちは、緊急援助が始められた最初の数週間に「5歳以下」を対象として実施される集中的なケアを受けられなかったのである。したがって今後の活動はこの年齢層の子供たちを重点的に行なわれるだろう。

#### キャンプの撤去

さて次は悪い知らせである。ワドカウリ・キャンプを撤去し、別のキャンプに移転しなければならなくなった。キャンプ全体ないしほとんど全部が6月の半ばまでに撤収されよう。なぜか。理由は二つある。一つは水が涸渇しつつあること。もう一つは本格的に雨期が始まれば、ワドカウリは外部から全く隔離されてしまうためである。

はるか昔からワドカウリの集落は砂漠の中であって、遊牧民や国境を越えて行き来する商人たちが利用する給水地点であった。雨期が始まる前の乾ききった数カ月間は、ワドカウリは干上がったアトバラ



川のひとつにあって常に最大の水源を有する地の一つであった。エチオピア国内のチグレ州を逃れてスーダンに流入する人々が立ち止まる場所としてごく自然だった。

もし、こうした難民が数百人の規模であれば、あるいは合計で数千人であれば、水は何も問題とならなかったであろう。しかし、何週間にもわたって毎日毎日数千人がたどりつき、水源はあつという間に汲みつくされてしまったのである。

現在はキャンプの貯水タンクと少し小さな水源の間を行き来する給水車が生命線となっているが、この貯水タンクと水源の距離は日増しに広がってきている。いくつかの隣接した村は小さな村落で、浅井戸に作られている。UNHCRのフィールド・オフィサーは「もし私たちがこの浅井戸を汲めば、2～3日で枯れてしまい、元に戻すには何年もかかることになるだろう」と語っている。

皮肉にも、誰もが祈っている雨が問題を何ひとつ解決しないまま、新たな問題を引き起こすことになるのだ。この地方の黒い土壌はひとたび雨が降るとぐちゃぐちゃに滑る泥道になってしまい、どんな種類の車輛も通行不可能となるからだ。ワドカウリは最も近い舗装道路とゲダレフ市から約100kmも離れており、雨期に入ると3カ月以上は輸送路がマヒし、いかなる物資も供給できなくなってしまう。

したがって、ワドカウリ・キャンプの撤収と移転そのものが残された唯一の方法である。撤去作業はすでに開始されている。3月17日現在で2万5000人以上が南と北の各キャンプに移送され、さらに毎日1500人がワドカウリを離れている。家族や友人が離ればなれにならないよう移動は出身の村ごとのグループに分けて行なわれている。各グループの健康状態が、どのグループを先に出発させるかの最も重要な決め手となる。

1台のトラックに40～50人の難民が乗り込んで、50～200km離れたキャンプに運ばれる。行き先は以前に作られた定住地もあるが、給水システムを施し、平らで何の変哲もない荒地にテントを並べただけの新たに設置された用地の場合もある。

水源はさまざまだが、水がどこでも決め手となる。

カルコラやウムラコバのように掘り井戸の隣に設置されたキャンプ。エルファウのように灌漑水路に沿って作られたキャンプ。国境近くのいくつかの川に残された水源の側に設けられたキャンプ（サファワ、ワドヒレウ）もある。またこれまでに、カシュム・エル・ギルバの人工湖の東岸に新しいキャンプを設営して大量の難民をここに移送しようという計画が実施されている。

これは、いわば時間との競争である。この移送計画の目的は、ワドカウリに現在収容されている7万2000人（3月17日現在）とエチオピアから引き続きやってくる1万人を6月半ばまでに移すことである。そのためには何百台ものトラック、何トンもの燃料、そして何百万ドルという資金が必要となる。飢饉で憔悴しきり、病気で数が激減した難民の集団を引き連れてのこの移動計画は、世界の最も暑い地域の最も暑い季節に行われる。しかしやらなければならない。他に道はないのだ。

#### 耕作は不可能

悪い知らせはこれだけではない。農耕期は雨期の前に始まる。あらかじめ農地を耕していなければ時期を逸してしまう。もしエチオピアから逃れた難民が今年の12月までに帰国するとすれば、彼らの中の屈強で働ける者はもう既に一足先に戻って自分たちの土地で耕作の準備を始めていなければならない。収穫がなければ帰国もできないからだ。

しかしながら、1984年10月から今年4月までにスーダンに流入した30万人のエチオピア難民のうちすでにエチオピアに帰国したと報告されている者はほとんどいない。作物の種もなく、農具もなく、荷車を引く馬・牛・ロバなどの家畜がいなくて、どうして農作業につけるだろうか。

エチオピア難民のスーダンへの大量流入は、まず第一に緊急救援を必要とした。UNHCRとスーダン政府難民局（COR）、そして小規模であるが少しずつ数を増しつつある民間団体を通じて、国際社会はこの危機に対して立ち上がった。今求められているのは、この危機的状況を永続させないためのヴィジョンなのである。（MICHEL S. BARTON）

## 「難民と人権問題」(下)

久保田 洋

国際連合欧州本部人権担当官

### 1. 広範な対処の必要性

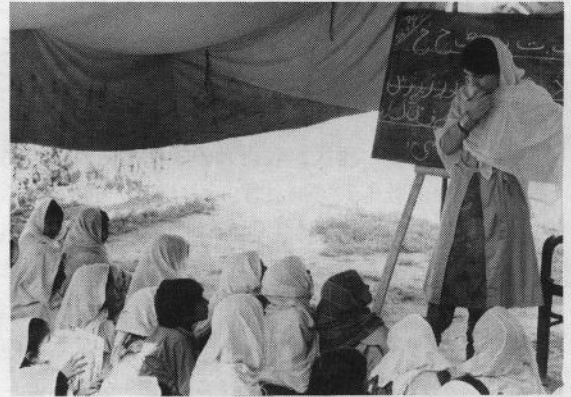
難民問題は、難民が個々の人間であることから、そのミクロの対象としての臨床的対処が重要であることは言うまでもない。しかし、その難民が発生するには、世界秩序の不健康状態というものが根本にあるのであって、その辺に病理学的な検討と、それに従った新しい方向性を示さない限り、永久に続くかも知れない現象である。<sup>※1</sup> 特に厳密な意味における難民に加え、俗にいう経済難民とか移住労働者などの問題も含めると、これが人間が存在する限り、また国境が存在する限り継続するかも知れぬ問題であることはあきらかである。

従って、難民援助を手掛けている層も、将来は、広く人権分野の人々、NGOともより良く連絡を取り合い、意見を交換する必要があるといえよう。

「人権」と一語で説明・表現しようとするのでなかなか難民問題との相関関係が連想できないだけで、人権の各項目を拾ってみると、それらがいかに密接な関係にあるか分かる。たとえば、反政府運動家の拷問や長期拘禁問題、政治的理由による行方不明・失踪者問題、人種その他による差別、表現自由の制限、集会結社自由の抑圧、奴隷制度、不法処刑問題、児童権利侵害、少数者（民族）弾圧、非常時や戒厳令下における人権侵害、不当な開発、食料の権利の否定、などがなんらかの形で難民問題の原因となっているのである。

また、長期的に難民の発生しない状況を構築するには、難民の発生地域における、農業経済の立てなおし、そして、国家経済の自立化の促進、貿易バランスの確立、文盲の追放、医療の完備、各種教育の徹底、そして、民衆のための開発プログラムの導入、科学・技術を人々の生活レベルを高めるために効果的に利用することなど、人権面での充実が図られなければならない。

結局、それら、諸々の問題が解決をみるのが、直接・間接に難民の問題を解決に導くことを知るべきであろう。<sup>※2</sup> その意味では難民関係の人々、NGOは、平和・軍縮・開発の人々、NGOと横の連絡をとり、新しい国際秩序の設定を考えていかねばならない。それに、一般市民、学生、研究者、ジ



アフガン難民の女生徒たち ©UNHCR

ャーナリストなどとの意見交換も非常に重要なものである。

### 2. 新しい国際社会に向けて

難民問題は、人権・平和・開発と結びついている。よって解決に向けてその長期的な指針を設定するには、それら全体像をみていく必要がある。

しかし、人権、平和、開発の相互の関係を単に抽象的に示して話が終わりでは、それほど価値があるとも思えない。そこには具体的、科学的でコンストラクティブ（建設的）な議論がなされる必要がある。

国際政治・外交の駆け引きの上から『「人権・平和・開発」の相互の関係』という決まり文句をみると、実は、いかにも国連らしい妥協の産物でもあることは忘れられない。実は、人権は、「表現の自由」などを中心と考える西側諸国の「錦の御旗」であり、平和・軍縮・安全というのは東側諸国の「外交方針」であり、開発は、南・第3世界のそれまでの民族自決権に替わる「合言葉」である。その妥協点が、国連の三位一体論なのである。そして難民問題もその盆の上に載っているのである。そこに世界的な共通の理解というものは存在しないのである。

さて、それでは、「人間が人間らしく生きるため」という普遍的な理想を、いかにできるだけ建設的に現実の行動の中に盛り込んで国際社会の中で生かしていくかということが課題となってくる。

ここで、長期的にみて非常に大事なものがひとつ

みえてきそうだ。それは、世界の人々の教育活動、啓蒙活動、自立教育……すべての教育である。教育は、新しい国際的道德律の確立・前進を可能にするといわれる。これについて国連事務総長は、1982年の人権デーにいまじくも次のように述べた。「人権の分野における国連の有効性は、説得力と道徳的権威の行使とにかかっている。……われわれの目的は、すべての権力の座にあるものをして、基本的人権を無視したり、侵害したりすることによって得るものよりも、それによって失うものの方がはるかに大きいことを認識せしめるという思潮を作り上げることにはかならない。このような思潮の創造は、人権の保障という理想を支持するすべての市民の参加を必要としている」と。

人権基準を高めること、そして真の意味における開発（発展）の意味することを考えることが、各国、各団体、各個人にとって重大な関心事になるような新しい思潮、哲学の創造こそが難民問題を考えるにあたって根本的対策とならざるをえないであろう。<sup>※3</sup>これを目指す教育は、一般に人権教育、平和教育、開発教育、国際理解教育などの名称で呼ばれているが、これが本格的になさなければならない。

たとえば、今、仮に、グローバルな視野からみた「人権」という授業科目が、小学校、中学、高校、大学と通じて設置されているような状況にあったとすれば、「難民問題」を社会の人々にいまさら一生懸命説明しなくてはならないなどという、なさけないことには少なくともならないだろう。

「人権は教育に始まり、教育に終わる」などと言われるが、まさに言い得て妙といえる。

そして、その教育は、従来のような単なる情緒的な教育に終らず、「この複雑な国際社会の中において、日本そして、それぞれ日本人が、どのように国際社会をとらえるのか、そして、そこでは一体何をするつもりなのか」など、根本的そして建設的な自らの指針を定める、具体的なものでなければならぬといえるだろう。その意味では、今、日本そして日本人にとって、「その国際社会での信念は何なのか」が問われているともいえる。

#### 〔付 記〕

筆者は、国連人権担当官、国連人権小委員会（差別防止及び少数者保護小委員会）事務局次長。

本稿は、個人の資格で執筆されたもので、必ずしも国際連合の見解ではないことを付記する。

執筆にあたり、筆者は、ジュネーブにおいて第41回人権委員会出席中の緒方貞子教授にアガ・カーン・コミッションについてのお話を直接伺う幸運をえた。この紙面を借りて深謝の意を表したい。

#### 〈註〉

- ※1 栗野 鳳 「我々の自覚の連帯を求めて」緒方・マタイス編『世界の難民』明石書店（1983年）
- ※2 緒方貞子 「新しい人道秩序を求めて」、前掲『世界の難民』では「難民を考える過程で、我々は日本の社会にあるさまざまな差別、偏見の問題についても、目配りを多少するようになったのではないかと思う。在日外国人の問題、アイヌの問題、同和の問題、あるいはまた帰国子女の問題も、いずれも差別と偏見にかかわるもので、これらがとりあげられるということは、いずれについても少しずつ真剣に考え、対応するという風潮が出てきていることを示すものであろう。そのことから考えると、難民は、我々日本人に運すぎたかもしれぬが大きな刺激を考え、それに対して応えようとする日本人がたくさん出てきたということ……」を指摘している。226ページ
- ※3 拙稿「市民人権活動の国際化を」読売新聞論点（昭和60年2月1日付）参照

## ☆50号記念 今、何考えてる？

岩崎 駿介 ◀私は今、例えばタイのクロントイ、インドネシアの都市内にあるカンボンのような一般に「スラム」といわれている地区の空間的すばらしさに大変興味をもっています。こういう地区は、その狭い路地に入ってゆくと、地区全体がひとつの大きな家の中の様であり、水浴している人、食事中の人、はしゃぎまわる子供達、仕事や内職にはげむ人達などがまる見えであって、固く閉ざされたり、さえぎるものはありません。路地と家の関係、家と家との関係が先進国では見ることの出来ない親密な関係で配置されており、私としてはすみからすみまで、その空間の魅力の源泉がなんであるのかを知りたいと思っています。もとよりこのような空間が生ずるのは、人と人の関係が、われわれの社会とは異なるからです。私は、私達が「貧困」ときめつけ、「救援」の対象にしている人々の生活の中にこそ、今後の人間社会において非常に積極的な意味を担い得る内容が数多く含まれていると思っています。

内山田 康 ◀マザーテレサが「自分のためにやっている」と言ったそうだが、一番深い所にある動機が「自分のためにやっている」であることを忘れずに、プロのコーディネーターとして、どこにいても、人間との繋がりを見つけてゆきたい。

熊岡 路矢 ◀ボンベイの街を歩く機会があった。どの通りにも人があふれ、露店もいっぱい。とても活気のある街だった。そんな熱気の中、多くの人々は路上で暮しをたてている。昼は日蔭を求め、夜は街路樹の下、むしろに体をよせあい家族が一つになって眠る。雨の降る季節は大変であろう。路上で生まれ、路上で育ち、路上で終えるかもしれない一生。彼らとその小さな小さな家財道具が神々しく見え、あらゆる製品に溢れる「日本」がかすんでしまった。

佐々木志保 ◀T/E 創刊号の発行日を見ると80年12月になっている。私がまだJVCの存在すら知らない頃である。そして4年半、編集長も4代目になった。毎月毎月の締切に追いまくられ、集まりの悪い原稿に頭を痛めている編集長の姿を思うと、たったひとりの編集部でよくまあ50号まで続いてきたなという気がする。それでもやはり、100号、200号と発行し続けて欲しいと思う。そしてそのために私達読者は何ができるだろう。毎月毎月苦勞して出されるT/Eをいっしょうけんめい読むことはもちろ

ん、質問をし、意見や希望を伝えることはできる。第50号をひとつのくぎりとして私もできることからやろうと思っている。

柴田 久史 ◀JVCメンバーに告ぐ!! 難民になってしまった人々の苦しみ、悲しみ、怒りは、たとえ彼らが1000人いや10万人叫ぼうと日本へは伝わらない。もうすでに帰らぬ人となってしまった人々の無念さは計り知れない。私達JVCのメンバーが、現地へ飛び、彼らと関わっていく中で、彼らの代弁者となれる。その媒体として『トライアル・アンド・エラー』(T/E)が発行され、50号を迎えた。果してどれだけ彼らの気持ちを共有でき、伝えることができただろうか。私達は、戦争、飢餓、貧しさゆえに苦しんでいる人々の中にいる。何を見、何を感じているのか。直面している現実を目をそらさず、立ち向かう以外、事態は何も変わらない。もう一度原点に戻って、現場での活動の意義と、T/Eを発行し続けなければならない意義を自ら見直すことを望む。

下園 宏司 ◀各現場のプロジェクトで、毎日神経をすり減らしている同志には申し訳ないのだが、あえて言わせていただくなら、東京事務所が一番辛い現場であると思う。この一年、その東京事務所を感じた事を述べてみたい。「人に伝える」広報という部門に身を置いているせいもあるが、最近では精神性の世界に魂が彷徨するようになった。人間にとって一番幸せな時と空間はどこにあるのだろうか？ その解答らしきものが見いだせない疑問を、いかに他の人と共有できるのだろうか？ JVCに関わった当初は、非常に鮮明かつ具体的な現場での体験をしたわけだが、それ以後、確かに自己の中で意識が変化したからだ。消去法でゆけば、我々が目指しているのは、『豊かな人間性と精神的幸福』ではなからうか。その根底において真に理解し合い、連帯していれば、金や肉体的奉仕による物理的参加など、問題ではなくなる。the visible が先か、それとも the invisible が先か、それはあなた次第である。とにかく、現在の心境は「ふりだし」に立ち返りたい。それだけである。

高塚 政生 ◀「活動する」という事は、様々な角度から現在の日本で用いられている価値観を見直す事だと考える。諸分野での細分化、分業化、効率主義、公害、公害の輸出、核エネルギーの不毛な問題点、自然を支配しようとする点、在日外国人への権利抑圧、心身障害者への人間関係形成に関する意識の希薄さ。挙げればキリのない問題は、日本国内と

共に外国から押し寄せた諸現象により動かされている。この点に主体的、継続的に関わる事が、「活動する」事であり、この点において専従あるいは非専従の差はなく、活動の主たる場所が事務所であるか、現地であるか、生活の本拠地であるかの違いにすぎない。しかも、事務所・現地以外に関わる人々の方が圧倒的に多く、現地活動を体験した者を通じて個人個人の持つ先に挙げた様な価値観、生活態度をどう変えるかが、いろいろな問題の解決に一步一步近づく事だと考える。楽しく生きているだろうか？抑圧し、抑圧されて生きていないだろうか？どこまで人、物を愛しているだろうか？この様な自分への問いかけが、時には重要な価値観だと肝に銘じたい。

**鶴田 三芳** 田舎育ちの私は、都会が肌にあわず、年に3、4度は山に登る。2年前の5月だったろうか、杉林からひらけた所に段々畑があり、農作業の手を休めている老農夫に会った。そのかたわらに腰をおろし、持ってきた甘夏を二人で食べながら、ありきたりの話を始めた。聞くと、若い頃そのおじいさんは会社に勤めていたが、思うところがあり、やめてアメリカとアジアを旅したという。ひとしきり話し終わり、「さようなら」と言おうとした時、「どうしてボランティアなんぞしてるのかね？」ときかれたので、「少しでも幸せな世界を未来の子らに残したいから」と答えた。すると、おじいさんは「子孫に何か残そうなどと考えるはいけなないよ。私たちが生きているこの時間、この場所は私たちだけのものじゃないんだからね。未来から借り受けているだけだよ。だから、借りた時と同じように返せれば、いいんだよ」といいながら、私が持ち帰ろうとしていた甘夏の食べカスを土に埋めた。

**星野 昌子** 「JVCの機関誌発刊を計画中です。名前は『トライアル・エンド・エラー』に決まりそうです」と税田芳三・水野孝昭両氏から聞かされたのは、確か1980年も暮れに近づく頃だったと記憶している。機関誌抜きの市民運動は考えられず、この報を受けたJVC関係者は諸手を挙げて賛成した。だが月刊と聞いて驚いたのは私だけではなかった。締切に追いまくられながら、レイアウトその他の専門性が求められる仕事を無給ボランティアで成し遂げようというのだ。「季刊位が無理がないのでは」と、誰もが危うんだ。しかしT/Eはそれまで日本に無かった難民救援情報誌として発足、82年8月には第3種郵便物の認可を得て、発行部数も1500部

に増加した。編集人も無給から有(薄)給へと状況は多少好転したものの、相変わらずの激務が、初代の河合淳一氏に続いて大久保俊彦・本橋栄諸氏の胃壁を穿うがち続け、それは現役の下園宏司・前川昌代両氏にも及んでいるようだ。感謝と共に、世界の窮状にある人々と私達を結ぶメディアとして、今後も末永く継続されることを、心から希望いたします。

**前川 昌代** 「ボランティア」という言葉には若干の自負とともに、はかなさがつきまとう。人の善意は気まぐれで移ろいやすいからだ。まだ日本ではボランティア活動は根の張ったものではない。そんな中でJVCは6年目を迎え、T/Eもあえぎあえぎながらも50号になった。「もう5年も続いているのか」という感慨と「まだ5年しか経っていないのだから未熟でもしかたがないな」という気持が交錯する。JVCの活動について時々内部で議論したり、自問自答することがあるが、中には「JVCなんてなくても世の大勢に変化はないさ」という過激な言葉もとびだす。しかし私たちはこの5年間で日本の枠を出ることを学んだ。砂漠に生えた一本の麦では誰ひとりも満足させることはできないが、大きな畑になる可能性はある。そして砂漠はくいじめようと努力しなければ確実に広がっていく。

**森山久寿子** 目に見える傷の手当ては、どこまで治ったか知ることができるけれど、目に見えないものは知ることができないので、ともすると相手をだめにしてしまうことがある。定住難民の場合、衣食住足りても、友人がいない、言葉が判らない、といった精神的プレッシャーが少なからずある。それを押し測りながら活動を続けるので、ボランティアの方も、想像力や思いやる気持ちを強く要求される。それも、あまり思いこみが強いと、事実を見る目が曇り判断力をも鈍らせる。こういう活動につきものの理論や方法論はもちろん重要ではあるが、あまり教条主義になると人間という生身のものから、どんどん離れていってしまう。抽象的な表現しかできないけれど、相手を理解し認めようとするには、時間がかかる。難民とボランティア、難民と難民、ボランティアとボランティア人間同志のつきあいの輪、思いやりの輪を強く広くつくっていくと思ったら、あせらないことだと思う。今後の国内での活動は、せかせかした現状とは逆行するようになるけれど、ゆっくりでも地道にやっていくことが結局、近道になるのだろう。

# JVCプロジェクト

1985年 5月25日 現在

☆個人の方からの寄付につきましては、月ごとに集計を出し、裏表紙に掲載しております。  
個々の方のお名前は半年ごとに一括してご報告いたしております。

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
東京本部	<p>渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計、総務、情報収集および広報等。</p> <p>機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行</p> <p>JVC説明会～毎月第1月曜日 午後6時～9時 第3日曜日 午後1時～4時</p>	全国社会福祉協議会	<p>岩崎駿介(代表)</p> <p>星野昌子(事務局長)</p> <p>熊岡路矢, 鶴田三芳</p> <p>佐々木志保, 下蘭宏司</p> <p>内山田 康, 前川昌代</p> <p>高塚政生, 柴田久史</p> <p>斉藤美香代 他15人</p>
日本国内	<p>●日本語家庭教師</p> <p>東京、埼玉、神奈川、千葉、山梨に定住している難民の家庭を訪問して日本語及び生活の指導。昨年10月より神奈川県大和市に開校した日本語教室は、5月中旬より第Ⅲ期を開始。地区別にハイキングなどの交流会を催した。機関誌の『そんぼんと』(クメール語で“手紙”の意)を発行している。</p>	<p>禅林寺</p> <p>UNHCR</p> <p>中部善意銀行</p>	<p>森山久寿子</p> <p>他約70人</p>
	*バザー、ハンディクラフト販売		関 田鶴子 他約20人
ソマリア マガネイ・キャンプ (ゲドー郡)	<p>●農業による自立促進</p> <p>残りの20haの農地を耕作する農民40人の選出をしている。旧遊牧民であった人々に今まで食べる習慣のなかったナス、カボチャなどを使って料理教室を始めた。またソマリアの歴史を知るために日本人スタッフは難民の長老をひとり選んで勉強会も開始。自然農業を実践する福岡正信氏、よつ葉牛乳を産地直送する市民団体「乳研連合」、「中部リサイクル運動市民の会」とともに「砂漠に種をまく人の会」を設立。福岡氏をソマリアへ派遣する計画を準備中。</p> <p>●補助給食／基礎医療</p> <p>新難民が旧居住区からマガネイ・キャンプ近くのマグドーへ移されたため、そこで補助給食と基礎医療活動を行っている。さらにソマリア政府の趣意で、マグドーから300km離れたジャララクシ・キャンプへ新難民は移動させられる予定なので、補助給食、基礎医療を行うため施設建設を開始した。</p>	<p>UNHCR</p> <p>レフュジーズ・インターナショナル</p> <p>朝日新聞厚生文化事業団</p> <p>仏国土をつくる会</p> <p>創価学会</p> <p>ジャパン・タイムズ</p> <p>九段ライオンズクラブ</p> <p>秋田大学「アフリカ難民を助ける会」</p>	<p>税田芳三(ソマリア事務所長), 山口誠史, 掛村 均</p> <p>高橋一馬, 米澤 聡</p> <p>久保祐輔, 柿原建三</p> <p>モハメッド・アデン・モハメッド, シャッド・モハメッド・ムザール, ラジッド・モハメッド・ランジャイル, サディック・モハメッド・アリ, モハメッド・ハジ・ヌール</p> <p>嶋 紀晶, 樫田秀樹</p> <p>角田正恵, 石井弘代</p> <p>現地スタッフ25人</p>
エチオピア アジバール (ウォロ州)	<p>●緊急医療事業／治療のための給食</p> <p>入院患者は現在150人、外来は約100人。診療、給食、現地ワーカーの教育の三つが現在行なわれているプロジェクトであるが、この外のプロジェクトについても調査中。</p>	<p>朝日新聞厚生文化事業団</p> <p>(株)B・R・B</p> <p>ノートルダム修道院</p>	<p>仲佐 保, 石井清美</p> <p>荻野美智子, 工藤芙美子</p> <p>福村州馬, 加納 妙</p> <p>竹内敦子</p> <p>現地スタッフ約80人</p>

活動地区	活動内容	出資団体	担当者
バンコク事務所	渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報, バザー等。 季刊『ニュース・レター』(英語・タイ語)発行	全国社会福祉協議会	佐藤正喜(バンコク事務所長), 本橋 栄 ポンピモン・チャイブーン 勝俣江美, 原園秀子 ティアン・パントゥー 他約10人
カオイダン (カンボジア 難民キャンプ)	●西崎憲司記念技術学校 自転車, 牛車, モーターバイク, 自動車, 水ポンプ, 発電機の整備技術を習得する。 国境の難民村から新難民が移動してきたので, 技術学校も移転を迫られた。6月11日, 新築校舎にて開校予定。	UNHCR レフュジーズ・インターナショナル 妙心寺派宗務所 花園会	トンディー・ソムカネ 古西 勇 ソムヨック・ラタナタム 熊木政江
タイ・カンボジア 国境 (カンボジア 難民村)	●レントゲン移動診療 移動レントゲン車による, 難民村及びタイ被災村の巡回レントゲン診療。 バンブー村, サイト2, サイト6にて活動開始。	WFP/UNBRO 日本青年会議所 関東地区医療部 会, 城西病院 西本願寺 結城青年会議所	サルミエント・ロドリゴ クリアクライ・プティ ヤビピン スラ・プロムチャン
	●補助給食 4月に入り, 難民の強制移動が実施され, JVCの活動地はサイト2(旧ノンチャン村より北に約50kmの国境沿い避難地)に移り, 4月15日よりそこでドライバックを, 病院, MCH(母子保護施設)へは食事の配給を開始した。	WFP/UNBRO	武田長久, 浜野敏子 トンチャイ・クラタルムボン 尾尾慶治 プレムチット・スリホン カヌエンニット・ソーンマユラ マーシャ・イシイ
バナニコム (第三国定住待ち 難民一次収容施設)	●文化・オリエンテーション 本年度から日本語学校は閉校となり, 以下の活動に変更となる。 ①日本語の日常会話の習得 ②日本に関する概略的な情報伝達 ③日本へ行くまでの手続き等の理解を深める	天理教千葉	浜崎妙子, 常田正行 落合正幸
地域開発 (仮称)	●バンコク市内のスラム地区 奨学金援助: スラム地区定住児童のための学費援助 図書館: 6区にあるバンコク市の青少年センターの一角を借り受け活動を開始した 建材提供: スラム立ち退き者, あるいはスラム内に保育所等を建設する際の物資援助 ●農村地区 前年度までに建設した井戸の補修, 管理, 基礎的健康教育。プリラム県サムヘン村を新たな活動対象地として更に調査中。	モロゾーMIRC NTV, JOFIC 庭野平和財団 YMCA横浜 聖ヨゼフ老人ホーム	ブンナム・チャルブリトゥム カモン・ミンムアン タウィチャイ・タームクナノン ヴァラナット・ドゥアンウドム 加藤哲也 ウィティバン・ラタナタリー
人材派遣プロジェクト			
シンガポール (ホーキンスロード・キャンプ)	●UNHCR - ベトナム難民キャンプでの管理・運営	日本YMCA同盟 アジアキリスト 教会議	ニール・リー
フィリピン (パターン・プロセッシング・センター)	●国際移民委員会(ICM) - 第三国定住手続きにともなう医療業務	城西病院	青井千恵

